

# 加瀬みきの ワシントン発 グローバル随想

## 社会を分断する 異質なものへの恐怖



イラスト・題字：長峯亜里

2020年のシリーズ「グローバル随想」はワシントンとロンドンから交互に。

「ワシントン発」は、西側同盟をテーマに調査・研究を行っている加瀬みきさんにご担当いただきます。(編集部)

### 離婚？ 冗談であってほしい

ワシントンでの生活が長くなり、すでに20年たつ。これほど政治的対立が深まり、社会が分裂しているのを経験したことはない。政治志向が異なるという理由で、友人関係が壊れ家族であっても口もきかなくなっている。

シンクタンクが発行する雑誌の編集長を務める友人と久しぶりに会い食事をすると、「ニューヨークに住む長年の友人が『君とは政治的立場が違うようだから、これから連絡を取りたくない』と言ってきた」と驚き失望していた。

いずれもインテリの共和党系である友人夫妻の夫は熱心なトランプ大統領支持派。一方、夫人はトランプ氏の破壊的な言動に違和感を強めている。毎年サンクスギビングには子どもや孫をはじめ家族が集まる。だが、トランプ氏の大統領就任以来、反トランプの親族は来なくなると夫人は嘆いている。「どうにか離婚しないでやっているわ」というひと言は、冗談であってほしい。

### アメリカは人種のるつぼだが

トランプ大統領になってから、社会の溝がより深まったのは間違いない。しかし、問題の根源はるか以前からあった。トランプ氏はこの溝を巧妙に利用し支持を集めたと言える。

アメリカは移民の国であり、「人種のるつぼ」。どこの国のどんな人種であろうと受け入れる、誰でも頑張れば社会的に上昇できる、子どもや孫は自分よりもより豊かな生活ができる、というのがうたい文句であった。そして、実際に多くの難民や移民の人々がアメリカを社会的、文化的に豊かにし、経済的繁栄に貢献してきた。

だが、一方で人種や宗教の多様化は、差別に拍車をかけ、社会の分断を生んでいる。

アメリカはWASP(White Anglo-Saxon Protestant)の国と言われた。白人でアングロサクソンのプロテスタントは、アメリカ建国の祖。英国、そしてオランダから宗教的差別に反発し大西洋を渡った人々である。1950年代、白人は人口の9割を占めていた。ところが、2018年には6割にまで減っている。そして20年には、非白人の子どもの数が白人の子どもの数を上回ると予測されている。

アメリカは世界最多のクリスチャン人口を抱える。人口に占める割合は現在65%。多いよう